

## 令和2年度第1回企画編集部会議事録

日 時：令和2年10月26日（月）15:00～16:30

場 所：かでの2・7 510 会議室

参加者：桑原部会長、坂下委員、小内委員、谷本委員、平野委員、山崎委員、横井委員  
道史編さん室（鶴原、杉本、伊藤、和田）

### 1 開 会

桑原部会長（編集長）あいさつ

### 2 議事

（1）各部会・小部会の活動状況について

（2）『北海道現代史』資料編（産業・経済）の構成について

（3）『北海道現代史』資料編収録要領（案）について

（4）新聞記事の取扱いについて

（5）その他

「北海道史への扉」第2号執筆予定者／北方資料デジタルライブラリーでのデジタル公開／  
北海道史年表の作成

### 3 閉 会

## 1 開 会

### ○桑原部会長

- ・令和2年度第1回企画編集部会を開催します。  
本年は、春先から新型コロナウイルスが蔓延してなかなか終息せず、部会の開催もこれまで先送りにしてきたが、令和2年度も半ばを越え、どうしても皆様のご意見をいただくことが必要となった。
- ・本日の会議資料は、事前に事務局から配布しているので、できるだけ効率的に会議を進めて参りたい。よろしくご協力ください。本日は議事も大変多いので、早速会議に入る。
- ・最初に、本年4月1日付けで事務局の担当者に一部異動があったので報告する。

### ○杉本主幹

- ・本年の4月1日付けで異動してきた杉本です。よろしくお願いいたします。

### ○和田主任

- ・同じく4月1日付けで異動してきた和田です。よろしくお願いいたします。

## 2 議 事

### (1) 各部会・小部会の活動状況について

#### ○桑原部会長

- ・本日の議題は4点あるが、最初の議題に入る。資料1をご覧ください。各部会・小部会の活動状況について、事務局から説明願います。

#### ○靄原室長

- ・細かい説明は割愛させていただく。資料1-1から資料1-7まで、各部会・小部会の構成員、部会の開催状況、調査先の一覧という順番で掲載している。資料1-7では、先日、各先生方に書いていただいた部会の今後の開催予定、主な活動内容についてまとめている。

#### ○桑原部会長

- ・以上の報告について、ご意見やご質問はありませんか。特になければ、ご確認いただいたものとして次の議題に移ります。

### (2) 『北海道現代史』資料編（産業・経済）の構成について

#### ○桑原部会長

- ・『北海道現代史』資料編（産業・経済）の構成について、最初に編集責任者の坂下委員から説明をお願いします。

#### ○坂下委員

- ・資料2は構成案ということで、章立てと資料の細かいタイトルをつけている。
- ・どういう手順でここまで来たかを説明すると、2018年度は研究会形式で専門ごとの議論を3回行い、2019年8月に分担案を作った。この分担案では、資料1点当たり平均2.3ページとして、360点くらいを掲載できるので、これを項目ごとに割って配分した。倍ぐらい集めてそれからセレクトすることにした。
- ・昨年12月には、それぞれの部門ごとに時期区分と分野をクロスさせるような資料を作ってもらった。
- ・本年8月の部会では、分野ごとに章が大項目、節が基本的には時系列の時期区分、その下に資料があるという構成を作り、そこに掲載する資料を何点か出してもらった。
- ・それから今日までの間、私と事務局で整理し、章・節立てで節が多いものは合体していただくなど、各章3、4節ぐらいの形でまとめてもらった。さらに整理が必要だが、一応こ

こまできた。

- ・本日議論していただきたいのは、章と節の間にある太い括弧について。例えば第5章では【工業1】、【工業2】、【情報通信】のように、章と節の間に分野を立てているものがあり、この扱いをどうするか。
- ・第7章の建設については、担当者が不在のため事務局で資料を集めている。第10章の労働は、諸般の事情でなかなか進んでいないが、新しいメンバーを加えて進めている。十分なこれで見通しが立ったとは言えないが、今後、随時進捗状況を報告させていただく。

#### ○桑原部会長

- ・ただいま、産業・経済部会の資料編についての報告が坂下委員からありましたが、この件について何かご質問ありますか。

#### ○山崎委員

- ・政治・行政部会との切り分け、整理がどのようになっているかというところで、第1章の地域経済と経済政策の切り分けが、政治・行政部会から拝見して気になった。政治・行政部会の取り扱うテーマとの重複がかなりあるのではないか。
- ・この点は当初から懸念していたところであって、北海道の開発政策や計画、制度がどう作られていくのかという政策の形成や決定に関するところは、政治・行政部会で取り扱わせていただくという理解でやってきた。例えば、前回の『新北海道史』の年表などをみても、今私が申し上げたようなところは政治の項でカバーされているし、また他の通史的な刊行物でも、政治・行政のところでは扱っている。しかし第一節「地域開発」を拝見すると、政治・行政のところでは取り扱おうと考えていたテーマが相当ここに入っている。
- ・2点目としては、こうした北海道開発政策の制度形成であるとか、計画・政策がどのように作られるかというところに関しては、既存の研究で相当進んでいると思われていたが、政治・行政部会の前田委員が、いろいろな関係資料を使いながら新しい観点で相当見直している。資料の2ページの部会の政治・行政部会の活動状況を見ていただいても、資料収集を盛んに行っているのはおわかりいただけると思う。
- ・産業・経済編の後で政治・行政編を出した時に、かなり重複してしまうことが懸念されるので、是非、入念な調整をしていただければと思う。

#### ○坂下委員

- ・第1章の第1節のほかにも、第2節もかなり重複する感じでしょうか。

#### ○山崎委員

- ・第2節も、例えば(3)ではいくつかの点で関わる場所がある。

#### ○坂下委員

- ・部会でも最初から言われていたことで、開発政策を受け取る側としての地域への影響や反応といったことを中心に書いてほしいと、話はしていた。難しいところはあるがうまく調整したい。

#### ○山崎委員

- ・繰り返しになるが、政治・行政編に制約が出ないようにご考慮と調整をお願いしたい。
- ・もう一つ、13ページを拝見して気になったのは、北海道開発のところ『北海道経済白書』を使っていない点。開発政策が北海道に何をもたらしたのか、その成果についてエビデンスを持って長年にわたって分析しているのが『北海道経済白書』だと、いま改めて勉強し直している。戦後の北海道の開発や経済で他の府県と比べて非常に重要なのは、北海道庁が経済政策を主体的に作ろうとしているところ。行政組織においても、調査研究機能を作って、総合経済研究所も置いていた。そうしたところでの成果として、『北海道経済白書』などの資料は、第1章でかなり駆使できるのではないか。

#### ○桑原部会長

- ・第10章「建設と労働」は重要なので、「建設」を抜かして北海道現代史は成り立たない。何とかして担当者を見つける努力をしてほしいが、いかがですか。

○坂下委員

- ・労働については、なかなか進まないこともあり、若い委員を新たに委嘱した。建設については、私も含め早く終わらせた中堅どころの人達と、事務局で集めてもらったものを一緒に整理するか、あるいは新しい担当者を探すなどしていきたい。

○桑原部会長

- ・よろしくお願ひします。ほかに構成案についてご意見はありますか。

○小内委員

- ・第2章は節が時期区分になっているが、第1章の節はジャンルの区分で、その下の(1)、(2)、(3)、(4)が時期区分になっている。この辺の調整が最終的には必要かと感じた。

○坂下委員

- ・資料集なので、最終的には一点ごとの資料がどうかということが大事。章の規模の差もあり揃えるのは難しいが、もう少し整理をしたいと考えている。

○桑原部会長

- ・構成案についてほかに何かご意見はありますか。なければ、資料3の作業工程について坂下委員から説明してください。

○坂下委員

- ・今後の作業行程ですが、現状としては先程申したように、いくつか穴が開いているところもあるが、あと2ヶ月で追加調査と掲載候補資料の選別を行わなければならない。追加調査を行った上で、掲載候補資料を選別し、筆耕に落としていく。事務局も人数が少ないので、とにかく早く筆耕段階にしていくというのが今年の作業。その後、年度末までには掲載資料の絞り込みや解説文の作成を開始し、解説文の推敲・調整が完了するのが2021年の12月になる。
- ・政治・行政部会との関係については、重複を避けながら良いものにしていきたいと思っている。

○桑原部会長

- ・作業行程について何かご意見ありますか。あと産業・経済編の刊行まで2年弱ですが、是非頑張ってください。よろしくお願ひします。

(3) 『北海道現代史』資料編収録要領(案)について

○桑原部会長

- ・資料4～6について、事務局から説明をお願いします。

○齋原室長

- ・まず資料5をご覧ください。どういう約束で資料を掲載していくかという要領案。「趣旨」にあるとおり、「原則としてこの収録要領は資料編各巻共通とするが、別に細則を必要とする場合は、各担当部会で検討したのち企画編集部会の了解を得て定める」としている。例えば聞き取り調査の結果をどう載せるかなどは、追って定めることになる。
- ・「2 資料の編成と構成要素」の「(2) 資料番号・表題」では、資料には通し番号を付し、編者が作成した資料の内容を示す表題を掲げる、とした。県史によっては、資料名そのものを使っているところもあるが、表題を別に作って掲げる方がわかりやすいと考えた。
- ・「(3) 年月日」で、出版物からの抽出記事の場合は、原則として当該出版物の発行年月日を記すというのが他の県史のやり方になっているようだが、それだけでは足りないと思い、「記念誌・年史などから抽出した過去の事象であって、その事象の時期を特定できる

場合はその年月日を、推定の場合は括弧内に年月日を記す」を加えた。編さん物の場合には、例えば1960年の事象を2010年の刊行された社史でとりあげたときに、それが2010年のような書き方になるとおかしいため。なお、年月日といっても資料情報の精度により、年月あるいは年までの表記にとどめる場合もある。

- ・「4（4）規定の追加」では、「この要領で定める事項以外にも、必要な事項が生じた場合は、別に定める。」としている。筆耕が進むことで新たな問題が出てくると思うし、また今後は、解説の書き方や通史編の言葉遣いをどうするかということも決めなければならない。取り敢えず、筆耕に必要な要領のみ、今回提示させていただいた。
- ・資料6は、参考として、他の県史ではどういう約束になっているか、項目別にまとめた。
- ・資料4は、この収録要領案に基づいて筆耕したときにどのような形になるか、4つのサンプルをあげた。例1でいうと、資料の通し番号に続いて、「北海道寒冷地畑作営農改善資金融通臨時措置法案の説明」というのは編者がつけた表題。その次に資料の年月日が入り、一行おいて実際の資料が筆耕される。資料の抽出が終わると、次に資料の出典。国会の会議録などは所蔵先を省略することになっているので、所蔵先は書いていない。
- ・続いて、例2「引揚従業員への対応」。これは1950年の資料なので、原本に句読点はほとんど入っていないが、意味を取りながら句読点を加えている。①のところでは原資料もA社と表記されているが、誤解を招かないように「ママ」と入れている。②のところは旧仮名遣いになっているが、旧仮名遣いはそのまま表記する約束になっている。出典は苫小牧製紙株式会社の「本社重役往復文書綴」という生資料で、所蔵先である苫小牧市立中央図書館を記載し、さらにそこでの請求記号を示している。
- ・続いて、例3「終戦直後の自動車と運送業」。これは先程の1950年より古い資料なので原本にはほとんど句読点はないが加えている。これは北海道庁が作成した「長官事務引継書」からの資料で、所蔵先は北海道立文書館所蔵、さらに同館の請求記号が入る。
- ・続いて、例4「炭鉱向け増産奨励番組」。①は文字資料ではなく音声資料をテープ起こしたもの。②は「炭鉱向け番組の編成」という表題をつけているが、これはNHKがまとめたラジオ年鑑が出典。2つの資料をまとめて提示するという例。

#### ○桑原部会長

- ・ただいまの説明について何かご質問やご意見ありますか。この収録要領に基づく編集作業はどこの部署がやるのか。

#### ○靄原室長

- ・事務局が行う。委員から抽出部分の指示をいただき、それに基づいて事務局で筆耕するが、実は掲載候補資料があまり出てきていない。筆耕の結果、ページが足りない、あるいは余ってしまうということも考えられ、また、著作権者からの許可が得られず載せられないということもあり得るので、作業時間が足りるのか危機感を抱いている。

#### ○桑原部会長

- ・坂下委員、そういう状況なので執筆予定者に原稿の督励をお願いします。他にありますか。

#### ○谷本委員

- ・音声テキストは、その音声を聞いてテープを起こしたということを、よりはっきり明記した方がよい。文字テキストだったものをそのまま掲載するのと、音声テキストを第三者が聞いて文字テキストに起こすのは違う。
- ・人名が出てきたときに、例えば例1で「政府委員（増田盛君）」と書いてあるが、前近代の『大日本古文書』などでは、名前が出てきたらその時の幕府の役職を補うといった約束がある。現代史では、解釈や補注は入れないで、テキストをそのまま文字にするという方針なのか。

○桑原部会長

- ・必要と思えば注を付けたらいいのではないか。

○谷本委員

- ・どちらかに決めた方がよいと思う。入れるのはかなり膨大な作業になると思う。一つ付けると全部付けないといけなくなると思うので、付けない方針だと考えればいいのでしょうか。

○桑原部会長

- ・難しいですが、注を付けると決めたらわかる範囲で付けるしかない。

○谷本委員

- ・付けていくと全部つけないといけなくなると思う。宮田輝に注を付けるのだったら、菅石炭庁長官も補わないといけなくない。そこは資料編のルールとして、どちらかに決めるといい気がするが、補注をつける方針となると、かなり調べなくてはいけないと思う。どうしますか、という質問です。

○桑原部会長

- ・靄原室長、どうしますか。

○靄原室長

- ・编者注記という形で、括弧で補うということですよ。他の県史では付いていないが。

○小内委員

- ・付けるかどうかの判断が難しい。

○靄原室長

- ・今回例に出した人の場合の役職はすぐに補うことができるが、他がどれ程できるか、実際にやってみないとわからない。わかる範囲内で補っていき、最終段階でわからないものが相当数出てきたら、最初付けたものを削るということではいかがでしょうか。

○桑原部会長

- ・そうしましょう。

○靄原室長

- ・とりあえずは書き入れながら筆耕を進める。

○小内委員

- ・音声データは、気にせずたくさん使ってかまわないものか。

○靄原室長

- ・道史編さん計画では、文献資料だけでなく様々な種類の資料を幅広く集めるとあり、いろいろあってよいと思う。

(4) 新聞記事の取扱いについて

○桑原部会長

- ・議題4について、事務局から説明してください。

○靄原室長

- ・最近、産業・経済部会だけでなく、他の部会でも掲載候補が具体的に明らかになってくるにつれて、「本当にこれ載せて良いのだろうか」とか、「一次資料とは何か」という質問をよく受けるので、何がより望ましいのかという指針のようなものを企画編集部会で定めていただければ、我々としても個別の相談に答えやすくなるので、案をつくった。
- ・去年と今年で、1945年から1988年までの期間の道新記事見出しを抽出して、1件ごとに関係する分野を入れて提供した。ご自分の分野で検索したら年代順に見出しが出てくるという使いやすさもあると思うが、参考資料としてというより、掲載資料として出されてく

る頻度が高くなったと感じる。

- ・資料7では、新聞に限らず、思いつく資料の種類を挙げ、それに対して、その資料の実証性と稀少性はどうかということを表にした。
- ・表の上の方は紛れもない一次資料で、これは載せるに足るものだというのはご異論のないところだと思う。会社・団体の文書、公文書、個人文書のほか、聞きとりも一次資料だと思う。
- ・法や規則は、実証性は高いが、稀少性という意味では検索するとすぐ出てくるものも多いので「中」とした。
- ・産業・経済部会で会社の資料調査に行き、社内報だったら見せていただけるところもあり、社内報からの抽出も多くなっている。文芸誌のようなものから、会社の内実や社長の方針を書いているものまであり、実証性は「低～高」とし、稀少性は一般の人がなかなかアクセスできないという意味で「高」とした。
- ・計画の前段階のプランや成果、実態調査の結果をまとめた行政刊行物は、実証性は「高」、稀少性は頒布量にもよるが「中～高」とした。
- ・後年編さん物で、社史や市町村史は、実証性はある程度高いのかもしれないが、どこにでも配架されているので稀少性は「低」。また、分野史「北海道〇〇史」というようなものは、実証性は高いかもしれないが、その分野のことを調べようと思っただけで見ると見る人が多いでしょうし、そういう本は図書館に行けばすぐにあるので、稀少性はやはり「低」。「〇〇の思い出」などとして出された自費出版物の類は、資料としては玉石混交ですから「低～高」。ただ一般の人が実際に目にすることは多くないので稀少性は「高」とした。
- ・資料集として出版・刊行されているものは、実証性はもちろん「高」だが、稀少性としては十分手に取りやすいことに加えて、道史の資料編と同種類のものであり、これを改めて出すというの、あまり適切ではないだろうと思う。
- ・次の新聞ですが、新聞記事自体、記者が自分の作ったストーリーが念頭にあるかもしれないが、実証性は必ずしも高くないという判断で、全部「中」にしている。ただし、稀少性は時代によって変わり、1940年代から50年頃の新聞は、所蔵する機関も限られ、一般の人がその中から探して読むということもなかなかできないとも言えるので、「高」とした。同じ意味で、縮刷版がない昭和43年までは「中」程度の稀少性はあるかなと思う。それに対して、縮刷版が出てからの記事や、まして記事検索が可能な時期の全国誌やブロック紙の記事は、稀少性は「低」とした。
- ・業界紙は、一般の人はそのような新聞があることさえわからないものも多いので、稀少性は「高」とした。雑誌は、実証性としては「中」程度かと思うが、1940年から50年代の雑誌でプラング文庫から拾えるようなものについては、一般の人には稀少性は「高」。また、業界内部で頒布されているような定期刊行物は、専門性も高いことが想定されるので実証性は「中～高」、稀少性も一般の人はなかなか手に取るものではないので「高」。それに対して近年出された普及雑誌のようなものは「低」とした。
- ・学術論文はどうかという質問も受けたが、古い論文で同時代の事象を分析しているものであればかなり実証性が高いものもあると思うので「中～高」。ただ、その他の学術論文は、ある意味道史と同じような種類のものなので、不適切と言えるのではないか。
- ・資料編は、いろいろな切り口や素材があるということを示すのが役割や魅力だと思う。資料自体でストーリーを語るとか、通史編とのリンクを意識しすぎると、新たな資料を掘り起こすというところが見落とされがちかな、という感想を持っているが、先生方のご意見をお聞きしたい。

#### ○桑原部会長

- ・この件についてご意見ありますか。先程の構成案を見ても、かなり新聞記事に依拠している方がいらっしゃるようだが、色々な資料を紹介して、様々な角度から物事を明らかにする努力をしてほしいと思う。できれば一次資料を中心に資料収集してほしい。

○横井委員

- ・今の説明を聞くと、稀少性というところに非常に重きが置かれていると感じたが、歴史と時代を表す最も重要な事象とか事項というものを出していかないといけない。みんなが知っているようなことや別の資料集で取り上げられているものであっても、載せないといけない場合もあると思う。そういうものを省いて、あまり見られないものを特にここに載せてほしいというように聞こえたがどうなのか。

○靄原室長

- ・大事なものであるということで載せていいとは思いますが、稀少性ということの目安というのはいらないでもいいですか。

○横井委員

- ・稀少性は何を基準にされているのかあまりわからなかった。

○靄原室長

- ・一般の人が手に取りやすいものか、こういう事業でもない一般人が目にするものではないかの辺りだと思う。

○小内委員

- ・資料編の目的が、研究者が読んでも納得するようなものかどうか、一般の人が見ても分かりやすいものかどうかと言われる。一次資料は難しいものも多いし、それが何を意味するかということは一部分しか触れていないので、必ずしもその資料を出すことによって一般の人の理解が進むとは思わない。専門家であればネットで探せばでてくるような資料ではあるが、一般人ではそこまで辿り着かないような資料で載せたらずっとわかりやすいだろうと思っても、それなら「低」になるのだろうかというところがあって、その辺が資料を絞るときに難しい。

○山崎委員

- ・北海道 150 年で敢えてもう一度北海道史を作っている意義、50 年前の道史があって今回また出す意義はどこにあるのかということを示していくことが大事だと理解している。
- ・今、物事を調べるといところでいうと、少し頑張れば資料編に載っていなくても、典拠さえ明らかになれば、道立図書館でも各市町村立図書館でも調べることができる。そうした意味では、進化形を示していくことが、今回、道史を作るという意義になるのかなと思う。
- ・一般の道民の皆さんに対する理解ということについては、通史や解説でフォローしていくという役割分担をしていった方がよいのではないかと。

○桑原部会長

- ・他にありますか。繰り返しになりますが、新聞資料に偏重することなく、色々な資料を発掘していただきたいと思います。

(5) その他

○桑原部会長

- ・資料 8 について、平野委員から説明してください。

○平野委員

- ・「北海道史への扉」ですが、昨年度第 1 号を発行し、今年度第 2 号を発行するというところで、本年 7 月に小部会で話し合った。論文・研究ノートについては、ここに挙げている 4



人の方に書いていただくことを了解いただいた。小川さんにはアイヌ関係の構想を書いていただく。

- ・余録は、前近代小部会でのアイヌ民族博物館職員とのディスカッションの成果などを、谷本先生に書いていただく。他の先生方にも現在担当されてところを書いていただく。
- ・全体構成は、昨年発刊したものと変わらない程度ということで、この内容で来年3月に発刊するよう作業を進めている。

#### ○桑原部会長

- ・第1号は今年3月に出版した。最初は立派な研究紀要の形態がいいのではないかという議論もあったが、最終的にこういう形態に落ち着き、良かったのではないか。
- ・第2号について、何かご感想、ご意見ありますか。ではこの方向で編集を進めていってください。
- ・次に資料9について、事務局から説明してください。

#### ○靄原室長

- ・資料9は、北方資料デジタルライブラリーという北海道立図書館が運営しているサイトの表紙。昨年の道史編さん委員会で、できるだけデジタルデータでの公開を刊本と並行して進めると決定されたので、この北方資料デジタルライブラリーに道史を載せることで、北海道立図書館と請負っているNTTデータと打ち合わせを進めている。
- ・『北海道史年表』の作成について補足説明させていただく。『北海道史年表』は、編さんスケジュールの最後の年にクロニクルと一緒に刊行する予定で、現在増補・改訂作業に着手している。1970年までの記載がある『新北海道史年表』をデジタル化し、新しい部分を補足していくという作業だが、特にアイヌに関する記述など、今の表現では不適切な部分もある。そこで、近世以前の部分については谷本先生、近現代については小川先生にご協力いただいて、文言の見直しや修正をお願いしたいと思う。
- ・そうした作業も含めて2ヵ年かけて修正・加筆し、できれば来年度末には、北海道デジタルライブラリーに暫定版の年表を入れられないかと考えている。そして、最後の年の実際の刊行に向けた作業としては、現代史の通史編もその頃には出ているので、委員の先生に改めて精査していただき、完成版の『北海道史年表』に置き換えるとともに、刊本でも出版するという流れにしたい。

#### ○桑原部会長

- ・年表もデジタルライブラリーに入れることにしたのでですね。

#### ○靄原室長

- ・まず暫定版をデジタルライブラリーに入れる方向で、今後道立図書館と調整していきたい。年表をまず載せることで、道史編さんの期待への呼び水にもなるかなとも思う。

#### ○桑原部会長

- ・ただいまの説明について何かありませんか。

#### ○平野委員

- ・年表は作りつけでなく、その後付け加えていくことが可能なものですか。

#### ○靄原室長

- ・デジタルなので逐次修正が可能。

#### ○平野委員

- ・そうした方がいいですね。

#### ○山崎委員

- ・デジタルの良さを生かすという意味で、可能だったらですが、スペースに無限の余力があるので、単に字面だけではなく、写真等を随所に入れて見やすいようにすると、デジタルでやる意味や強みが生かされるのかなと思う。余力があればそうしたところも工夫してい

ただければと思う。

○桑原部会長

- ・ 現行の『新北海道史年表』では、アイヌ関係の項目は資料的な表現で表記していると思うが、これから出す新しい年表については、先程事務局から説明があったように色々と配慮しなければいけない。谷本委員と小川委員にはしかるべき段階で原稿の点検をしていただきたいと思う。よろしくお願いします。
- ・ 以上で、こちらで用意した議題は全て終わりましたが、他に何かございますか。なければ、以上をもちまして、令和2年度第1回企画編集部会を終わります。委員の皆さん、長時間のご議論ありがとうございました。

(以上)